

文弱の価値

吉川幸次郎

筑摩書房

文弱の価値

昭和五十七年八月二十日 第一刷発行
昭和五十七年十二月五日 第二刷発行

著 者 吉川幸次郎

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一七六五一（営業）
電話東京二九四一六七一一（編集）
振替東京六一四二二三郵便番号一〇一九一

整版 井村印刷 印刷 多田印刷 製本 矢島製本

©1982 吉川ノブ

Printed in Japan 0093-8213-4604

乱丁・落丁本は、御面倒ですが、小社読者係宛にお送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目 次

思いやりの哲学——第十四回国際整形災害外科学会総会特別講演——

エリートと文明

杜 蹟 行

私の杜甫研究

我的杜甫研究

訪中詩事

一 開端 セ 二 北京 三

「趙氏孤児記」解説

文学批評家としての錢謙益

旧夢数片——二大蔵書家の思い出——

人民と京劇

三

一五

四二

五三

六三

七一

九五

一〇一

一三四

一四三

郭沫若氏追悼

一四四

綠楊唱酬統記

一四八

懷旧と希望

一五六

顧安承教——中国社会科学院代表团を迎えようとして——

一六二

日中文化交流協定の締結を賀して

一六五

*

太宰春台の「修刪阿弥陀經」

一六七

風流儒雅亦吾師——「日本書紀通証」の復刻によせて——

一七三

文弱の価値——「物のあはれをしる」補考——

一七五

「漢語文典叢書」序

一七六

天理図書館善本叢書の頌

一七九

*

三分説雑感——内藤博士の中国史観——

一八二

和辻哲郎博士と私

三六

「武内義雄全集」のために

三二

「武内義雄全集」第一卷「論語篇」解説

三三

三木克己君「中国文学論集」のこと

三四

不倦耄期勤——土岐善麿博士に——

三四

土岐善麿氏第二歌集「寿塔」

三五

挽聯一首——中島健蔵君に——

三六

お互いに大切に——中野重治に——

三七

一つの総合——「桑原武夫集」のために——

三八

円地さんの文学と父君

三九

五絶七首

四〇

*

中国文学と杜甫

四一

同姓名禍また弁妄

散歩道

大仏次郎賞選評

一九七七年読書アンケート

あとがきに代えて

清水

茂

二六

二七

二八

二九

三〇

文弱の価値

思いやりの哲学

——第十四回国際整形災害外科学会総会特別講演——

私は今日ここにお集まりの皆さまとは、大へん遠い領域の学問をいたしております。中国の古典文学、またその背景にありますこの国の哲学についての研究を、仕事としております。

いずれの地域の文学ないしは哲学も、人間の問題とは何であるかを考え、問題をのりこえて、人間の幸福とは何であるかを探究する努力であることに、差違はありません。そうした努力を Humanism と呼びますならば、それはどの地域でも、人間の地域である限り、同じであります。またさればこそ、皆さまのお仕事も、人間の健康という問題について、共通の努力をなさっていると、お見受けすること、申すまでもありません。

かく根底にある Humanism は同じでありますけれども、文学や哲学におけるその表現のし方は、地域によって多少の差違があります。皆さまの御専門である自然科学におきましては、その差違が乏しいのと違ひまして、地域の個性によって、その表現には多少の差違があります。

私が研究の対象としております中国の古典的な哲学では、人間の救済は人間自体によって可能であり、人間以上の存在、簡単にいってしまえば神様には、必ずしも頼らないという考え方が、有力であります。これは神様の存在を重要にお考えになる地域の考え方とは、距離があります。しかしこれは先刻申しましたように、表現のちがいでありまして、人間そのもののみを見つめて、その幸福を考えるか、神を媒介としてそう考えるか、そうした表現の違いに過ぎないのであり、人間の幸福の追求という点では、一致いたします。そうしてまた二つの態度は、多少の差違がありますとも、あい排斥すべきでなく、あい補完すべき関係にあると考えます。

しかし以上のことは、三年前、東京で世界医師会の総会が開かれましたときに、やはり特別講演者として御招待を受けました席上、「東洋におけるヒューマニズム」と題して、申し述べました。その記録は、公刊されております。講談社「学術文庫」、また筑摩書房「文明の三極」。また英文版も出来ております。“Humanism in the East”, The Asian Medical Journal, Vol. 19, No. 5, May, 1976. それらについて御覧ねがうこととし、ここにはくり返しません。

きょうは、そうした中国的な考え方、人間そのものを見つめることによって人間の幸福を求めるという考え方を、そのもっとも重要な古典の一つであります「論語」の中から、いくつかの章を抜き出して、御紹介することと致します。「論語」は、御承知の通り、紀元前五世紀の思想家でありました孔子の言行録であり、全部で二十篇、いずれかといえば断片的な言葉が、五百ほど連なっています。その中からいくつかを御紹介いたしますが、同時通訳の英語には、前世紀の英国の学者

James Legge の訳を使っています。

James Legge : Confucian Analects; The Chinese Classics, Vol. I, 1893, Oxford.

子貢^{しこう}という弟子が、孔子にたずねました。何かただ一つの言葉で、一生のあいだ守り通してよいものがありましょうか。孔子は答えました、それは恕^{じょ}、思いやりだ。自分がそうあってほしいと願わないことを、他人にむかってしてはならない。

子貢、問いて曰わく、一言にして以って終身之れを行のう可き者有り乎。子曰わく、其れ恕^{じょ}なる乎。己れの欲せざる所を、人に施す勿^なかれ。

もとの中国語は、

子貢問曰、有一言而可以終身行之者乎。子曰、其恕乎。己所不欲、勿施於人。論語衛靈公篇。
Legge の訳では、

Tsze-kung asked, saying, 'Is there one word which may serve as a rule of practice for all one's life?' The Master said, 'Is not RECIPROCITY such a word? What you do not want done to yourself, do not do to others.'

この言葉、大へん簡単でありますが、人間の生き方として大へん重要なことをいっていると思います。何かを他人に対して行動するときには、その行動の生む結果としての利益不利益、愉快不愉快を、まず自分自身の上に重ねあわせて考えて見る、その上で行動にうつせよ、というのであります。この簡単な言葉の裏には、二つのことがあります。

一つは人間は自分一人だけでは生きていない。常に人人と共に生きている。人は人人の中にいる。つまり社会的存在である。人人全体が幸福であるようにというのが、人間の願いであるということであります。もう一つは、人間はみな平等に均一だということであります。自分にしかけられたとして不愉快なこと、それは同じ人間である限り、人間として同じ条件にいる限り、誰にとっても不愉快にちがいない、だから、それを他人にむかってしてはならないというのであります。

このことは何でもないことのようにであり、ことに人間の平等が確認されています今日の時代では、一そう何でもない、普通の教訓と思われれます。しかし二千五百年前の孔子の時代には、ある勇気を要する発言であつたと思われれます。

すなわち当時の中国は、封建制度の世の中でありました。孔子の時代の中国は、全国がいくつかの侯国 Dukedom にわかれておりましたが、各地域の君主と官僚が、それぞれの領内を統治する治者であり、一般の人人は単に被治者として、政治に参与せず、ただ食糧を生産するのを仕事としていました。乱暴な政治をする君主ないしは官僚、重税を取り立てるそれら、殺戮を好むそれらに對して、己れの欲せざる所を、人に施す勿かれ、これは大へん手きびしい忠告であります。税金をとり立てられるがわの身にもなつて見る、殺されるがわの身にもなつて見る、そうしたことを、殿下よ、閣下よ、考えたことがありますか、そうした手きびしい忠告の言葉となり得ます。

忠告は今日のわれわれにとつても、なお全然必要ではないかも知れません。今日ここにおあつまりの皆さまは Humanism の使徒として、われわれ患者の幸福をお考え下さるのに忙しい。毎日

毎夜お忙しい。しかし人間には過ちというものがあります。患者に親切でおありになろうとお考えになりながら、お忙しすぎてふとそうでなくなる場合がおありになるとすれば、この言葉を思い出していただきたい。自分自身が患者であるとして、この不親切な態度を受けたとしたら、患者はどう思うだろうと、「論語」のこの言葉を思い出して下されば、過失の解消は容易です。人間の過失について、「論語」には、次のような言葉が二度見えます。

過ちては則ち改むるに憚る勿^なかれ。

過則勿憚改。論語学而篇また子罕篇。

‘When you have faults, do not fear to abandon them.’

またこれは孔子自身の言葉でなく、さっきも出て来た子貢という弟子の言葉ですが、紳士の過失とその恢復について、次のような面白い比喻もあります。

子貢曰わく、君子の過ちや、日月の食の如し焉。過つや、人皆な之れを見る。更^{あらた}むるや、人皆な之れを仰ぐ。

子貢曰、君子之過也、如日月之食焉。過也、人皆見之。更也、人皆仰之。論語子張篇。

Tsze-kung said, ‘The faults of the superior man are like the eclipses of the sun and moon. He has his faults, and all men see them; he changes again, and all men look up to him.’

えらい人の過失ですから、日食や月食のように、誰の目にも目立って、人人がみな見る。しかし

過失が改まると、人人がお日さまお月さまを仰ぎ見るように、あらためてその人を仰ぎ見るということです。

こうした思いやりの哲学、恕の哲学が「論語」という古典の中心、少なくとも中心の一つでありまして、その背後には、人間は平等という思想があること、上述の如くですが、ところで人間の悲しさとして、人間はすべての条件において、必ずしも平等ではあり得ません。まず健康の状態において平等でない。さればこそ病人というものがあり、患者というものがあり、またさればこそ皆さまの御努力が必要になって来るのでありますが、重要な病人の一つは身体障害者です。それに対しての孔子の思いやり、それについての章を、次には御紹介しましょう。

当時の侯国 Dukedom の宮廷は、それぞれ楽団をもち、お祭り、儀式、宴会の際に、交響楽を演奏しました。それらの音楽家は、みな盲人でありました。視覚の不自由な人は、却って聴覚が鋭敏だとされたからです。孔子は音楽の愛好者であり、また批評家でもありましたが、ある日、宮廷の楽団の指揮者の来訪を、その家で受けました。やはり盲人です。そのときの孔子の行動を、「論語」は次のように記します。

師冕見ゆ。

師冕見。

師というのは音楽家、冕^{べん}というのはその名です。その方が来訪した。

The Music-master, Mien, having called upon him,